

虹の彼方のキューバへの願い

宮本信生

今のキューバにとって最大の課題は、国家安全保障と経済完全保障である。

二〇〇三年春、ブッシュ大統領がイラク侵攻の早まった勝利宣言を行った直後、ラウル・カストロ国防大臣と懇談した。大臣は、「万全の体制はできている。米国は侵攻しても、キューバ軍民の民族主義的抵抗にあい、退路はない」と、人民戦争的ゲリラ戦を示唆した。また、去る五月、フィデル・カストロ議長は、米国こそテロリストを受け入れ、テロの側に立っていると米国を厳しく非難する演説を行った上で、キューバの小旗を手に米国の利益代表部に向かって抗議の行進を行った。TVをつけて、ホテルの窓から見ている。六時間二〇分に亘り、一〇万人の軍民が議長に続いたと報道された。絶対優位の軍事力を有する米国も、多大の人的犠牲を覚悟することなくして、キューバに侵攻することは不可能である。

残るは、経済と外交である。カストロ議長は、自分は「死ぬば、地獄へ行って、マルクスやレーニンに相まみえるだけだ」と言う。結構である。しかし、残された国民はどうなる。人間のエゴイズムを活用・善用する、せめて統制された市場主義経済を導入し、経済の活性化を図るべきである。ソ連崩壊後、恒常化している食料品・生活必需品・薬品の不足、停電、公共交通手段・サービスの劣悪化を直視すべきである。商店街のショウ・ウィンドウには歯ブラシや、懐中電灯が仰々しく展示されている。かかる状況のすべてを、米国の経済制裁のせいにするべきではない。

また、対外経済活動を拡大するための協調的外交が不可欠である。何時の日か、芯は強いが、教条主義的ではなく、穏やかなラウル・カストロ国家評議会議長と、柔軟で、新鮮なヒラリー・クリントン大統領のような政治家が、最高責任者として相まみえるならば、一九六一年以来のわだかまりを、共に水に流して、新しい友好・協調関係を切り開くとともに、米国との人的・物的・技術的交流を拡大することも可能であろう。

去る五月、妻の神崎愛がキューバの国際音楽祭に招待されて、国立管弦楽団などをバックにコンサートを行った。その際、二人で、京都在住の八八才の絵師が描いた二枚の金屏風を、フィデル・カストロ議長と、ラウル・カストロ国防大臣にそれぞれ贈った。議長へは、世界の古地図の上に黄金を求めて、西回り日本へ向かったコロンブスの南蛮船が、図らずもキューバに到着しかけている図柄である。これは、神崎が日本で行ったおりに、また今回キューバでも行った、物語風のコンサート「フルートと歌曲でつづる世界の旅」に因んだものである。

ラウル大臣には、後三年の役絵巻の構図を踏まえたもので、三名の武士が馬に乗って疾走している構図である。三名とは勿論、キューバ革命の中心人物、フィデル・カストロ、チェ・ゲバラとラウル・カストロである。一九六一年、事実上米国がキューバに侵攻したとき、この三名はそれぞれの防衛分担当責任地域へ急行した。将来、万が一のときには、頑張つて欲しいとの願いを込めたものである。

(みやもと のぶお／元駐キューバ大使)